

母樹の声

共鳴

自然との共生、生命の尊さ、目を向ける心のゆとり、
わたしたちが忘れかけていた大切なものを
一本の桜が教えてくれました。

虎尾桜のメッセージ

修験者の里として知られる霊峰・福智山。地元にとって、古くから信仰の対象でした。それは自然と共に暮らししてきた人々の畏敬の念の現れでした。しかし、明治以降、小さな町は日本のエネルギーを生み出す炭坑の町へと姿を変えます。黒いダイヤと呼ばれる石炭を求め、町には富と人が集中しました。さらに、拡大造林政策の名のもとに山の樹木が伐採され、杉やヒノキが植えられました。周囲の木も成長とともに虎尾桜の姿は覆われていきます。やがて自然に対する人々の畏敬の念も薄れ、そしていつしか、虎尾桜の存在も忘れ去られていったのです。昭和四十五年、炭坑が閉山し、その後、町の財政も破たん。自治体の倒産を意味する財政再建団体に指定されます。虎尾桜の存在に気づいたころ、町は桜どころではなく、すでに虎尾桜も枯死寸前でした。「最後の悲鳴を上げていたのでしょうか。あと数年発見が遅かったら、倒れていたかもしれません」。発起人の小林さんは、桜と

の運命的な出会いを感じています。「山の中で虎尾桜を見つけた井上さん。『開花した姿はわたしの恋人。もうすぐまた会えます』と目を細めます。」

会長の熊谷さん。「弁城地区にエドヒガンの群生を見つけました。これから先、まだまだ発見があるかもしれません。虎尾桜はその母樹の存在、ぜひ福智町をエドヒガンの里にしたい」。期待に胸をふくらませます。発足当初から力強く会を支えた久原弘き



↑十七年前、九人で発足した「虎尾桜を心配する世話人会」。中央に立つのが故・久原弘さん。



↑田川農林高校が行った杉の伐採作業。登山客が小川の上に設置した丸太橋。



↑はるばる虎尾桜を見に訪れた花見客。

ん。平成十二年に突然この世を去りました。文化財指定の朗報を喜んで間もなくのことでした。会の名前を決めるとき「虎尾桜はみんなの財産、わたしたちは陰で支えましよう」と「守る会」ではなく「心配する世話人会」にするよう提案しました。世話人会は久原さんの精神を受け継ぎ、今でも虎尾桜を陰から見守り続けています。

「緋色の花をいっぱい咲き誇り、昨年、虎尾桜は五千人以上を魅了しました。花見客は北海道から沖縄まで、全国各地から山の至宝を見に足を運びます。当初九人で発足した世話人会の会員も四十八人にまで増え、年会費三千元を出し合い、地道な保護活動が続けています。また、登山客が小川に橋を架けたり、虎尾

桜の周辺を清掃したりと、環境整備の輪も広がりを見せました。田川農林高校の生徒たちは、世話人会の活動を手伝い、三年前から杉の伐採などを続けてきました。しかし四月から同校は田川科学技術高校に統廃合されます。昨年末、閉校を前に行った農林土木科三年生による最後の奉仕作業。二生の思い出です。咲いたらぜひ会いに来たい。七人の生徒は、感慨深げに虎尾桜を見上げていました。人がかわることで虎尾桜の命は延び、その桜が人と人とを結びつけてきました。時代によって忘れ去られた桜が、時代の流れとともに発見され、人の心と手で、再び命を輝かせています。自然への感謝、生命の尊さ、そこに目を向ける心のゆとり。虎尾桜は、かつてわたしたちが忘れかけていた大切なものを思い出させてくれたのです。もうすぐ虎尾桜のつぼみがほころび始めます。今年もきつと燃えるような花びらで、会いに来るわたしたちを迎えてくれることでしょう。一本桜は物語を秘めて、そこに立ち続けています。

この桜を守ることは、
尊い命と自然を守ることでした。